まいろっさ

創刊号

真宗大谷派（東本願寺）
小松大聖寺教務所
〒923-0904
小松市小馬出町26
TEL：0761-22-0555
［発行者］
保木　悦雄
［編　集］
小松大聖寺教区教化委員会

【小松大聖寺教区発足】
ー新たな未来を創るー

小松大聖寺教務所長
保木（もつぎ）　悦雄（えつお）

2023年7月1日、小松教区と大聖寺教区は教区改編によって一つとなり、新たに小松大聖寺教区としての歩みがスタートしました。

寺院方・門徒方ともに新たな出会いと交流が生まれ、教化活動においても互いに連携・協力を図っていくこと、さらに教区財政の面においても会計の統合整理等によって、持続可能な教区運営を目指していくことが願われています。

改編の具体的内容については多岐にわたりますが、主なものをいくつか列挙するならば、まず相続講募財体制については旧小松教区を小松地区、旧大聖寺教区を大聖寺地区とし、それぞれの地区において組門徒会と寺院が相続講金御依頼完納に向け、責任をもって募財に取り組んでいくということが確認されています。相続講世話方の高齢化が進み、世話方不在となる地域が増えつつある中、特に寺院方の更なる協力とサポートが必要不可欠となります。

教化面においては、組門徒会と寺院方がお互いに協働して事業を行う「小会」の場において、地域でのお講の担い手や相続講のお世話方を育成する真宗門徒講座などが計画されていきます。

教務所の業務については、旧小松教務所が小松大聖寺教務所、旧大聖寺教務所が支所となり職員数も減少しますので、取り扱い業務の見直しとともに、事務の省力化と効率化を行っていく必要があります。ただし、相続講金の受付と収納事務は教務所・支所いずれにおいても行い、相続講台帳も共有化をし、利便性を確保していきます。

私は宗門や教区、お寺の行事の目的は、ひとえにお念仏に生きる人を生み出し、育てるための御縁づくりであると受け止めています。

前に生まれん者は後（のち）を導き、後（のち）に生まれん者は前（さき）を訪（とぶら）え、連続（れんぞく）無窮（むぐう）にして、願わくは休止（くし）せざらしめんと欲す。

『教行信証』

という親鸞聖人のご教示に励まされ、「真宗再興」の終わりなき歩みを共にしてまいりましょう。

引き続き、教区の皆様方には、宗門・教区を担う当事者として、新しい未来を創る様々な取り組みにご理解とご協力を賜りますよう重ねてお願い申しあげます。

大聖寺教務支所
（常葉会館）

小松大聖寺教務所
（常磐会館）

お講の活性化に向けて 門徒会役職者に聞く

新教区の課題

小松大聖寺教区門徒会会長
清丸　亮一

２０２３年７月１日から小松大聖寺教区が新たに発足しました。新教区では相続講制度の維持発展を目指すべきかと考えております。

明治18（１８８５）年に法義相続・本廟護持を目的とした相続講制度が発令されました。以来両地区では各組門徒会が組お講を中心に創設時の体制を大事に護り、努力を続けてきました。このような体制は当教区だけでしょう。

今ひとつ大事にしたいものは蓮如上人の時代から五〇〇年の時代を超えて続いているお講であります。お講の継続が相続講を支えていることは言うまでもありません。そこで最も力を入れなければならないのは真宗門徒講座（推進員養成講座）を積極的に開催し、実効性のある取り組みを実施していきたいと考えています。それによって各地域に推進員を生み出し、所属寺院を問わず集落町内ごとに講を組織し、さらには組門徒会が近隣寺院と共に聞法の場を開き、門徒さんひとりひとりが法義相続・本廟護持を実感できる教区となるからです。

13の組門徒会がお互い協力し合って全国にもまれな「法義相続・本廟護持」にひたすらこだわる真宗の地域を守り伝えたいと念じて止みません。

新教区発足にあたって

小松大聖寺教区門徒会副会長
野﨑　進一

最初に宗門より「教区及び組の改編に関する資料」が出されたのは２０１７年度であった。それによると宗門が直面している現状として社会環境の変化があげられる。お念仏の教えを次の世代に繋ぐために必要な宗門の財政状況は年々悪化をたどり、見過ごすことが出来ないところまで来ている。

教区改編は著しい社会状況の変化に即応し、真宗同朋会運動のさらなる推進に必要な教化体制及び財政基盤の確立並びに効率的な地方宗務機関の再編成を目的としている。

教区及び組の改編の背景には都市部への人口流出、地方の過疎化、少子高齢化などの社会現象により、家族の世代間継承が難しくなってきた。それに伴い仏事に対する価値観の変化、宗門の財政状況などの危機的状況があげられる。したがって宗務改革は不可避であるという結論に達した。

当初の改編試案は①教区単位の平準化、②行政区域に基づいた時代社会に相応しい区域割り、③教区の教化力を一層補強することへの指向、④将来の人口動態等を見据えた編成の４項目が策定された。これを地方協議会において、教区の個々の事情や課題、教区の歴史性や生活圏を細やかにくみ取って試案を再編成し、より現実的な取り組みができるようにした。その後、新教区準備委員会を立ち上げ、それぞれの小委員会で協議を行った。

合併したからには、小松大聖寺教区の隆盛を願って、がんばらねばなるまい。

組門徒会（くみもんとかい）

小松大聖寺教区には、大聖寺地区（旧大聖寺教区）に５つの組門徒会、小松地区（旧小松教区）に８つの組門徒会が組織されています。各組の世話方が中心となって、組お講を開きご門徒から相続講金を集めるお世話をしています。

組門徒会の大体の位置を表しています。
各組門徒会に所属する町については、
教区ホームページをご覧になるか、
教務所にお問い合わせください。

新しい小松大聖寺教区のホームページ

小松大聖寺教区改編に伴い、ホームページも刷新されます。行事予定やそれぞれの行事の詳細、手続きの仕方やテンプレートなど、皆さんが使いやすいホームページにしていきたいと思っています。ちなみにこの広報紙「まいろっさ」も閲覧できます。機会がありましたら一度、お訪ねください。

※「小松大聖寺教区」で検索するか、右記 QR コードからアクセスしてください。
（URL：komatsudaishoji-kyouku.net）

お講の維持と発展強化を願って

～お講の歴史をたずねる～

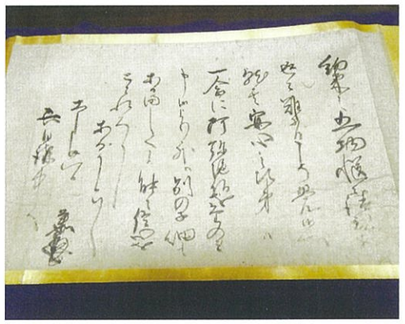
お講

現在でも小松大聖寺教区では地域の人が集まり、お内仏を前にそろって『正信偈』を唱和して、僧侶の法話を聞く、というお講が行われています。

浄土真宗におけるお講は、室町時代本願寺第八代の蓮如上人在世のころに始まりました。衰退した本願寺の宗主を継承した蓮如上人は、宗祖親鸞聖人が顕かにされた本願念仏の教えを世間に広めるため『正信偈』を唄うように、お勤めとして各地に伝えました。これは、文字を読めない人でも、大事なことが書かれている『正信偈』を口にすることができるからです。

江沼六日講　旧大聖寺教区

蓮如上人が福井県吉崎に逗留されて、北陸の地に本願念仏の教えをひろめました。鎌倉時代以降すでに形成されてきた地域の集合体（惣村）と結びついてお講が組織されていったと考えられます。やがて旧江沼郡の各村に作られたお講を取りまとめるための六日講が組織されていたことが分かる上人のご御消息（お手紙）が残されています。



約束之五物慥ニ請取候、返々難有こそ覚候へ、就其安心之次第は、一念に阿弥陀仏をたのミ申候より外ハ別の子細もあるまし候、能々信心をとられ候へく候、あなかしこ～

十一月廿八日　蓮如（花押）

六日講中へ

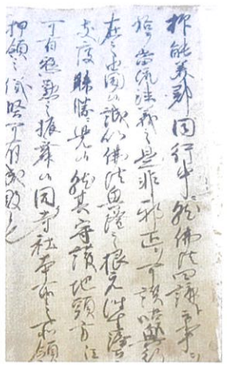
＊蓮如上人御消息
加賀市動橋町
篠生寺（本願寺派）蔵

この他にも「一向に阿弥陀如来御たすけ候へ」や「いよいよ信心決定せられ候て」「この趣よくよく総中へ披露せられ候べく候」などの記録が残されていて、念仏がひろまりお講が続くことを願われていることがうかがわれます。

現在では五つの組講（東組・西組・南組・北組・中組）が行われ、本山の相続講を支える土台となっています。

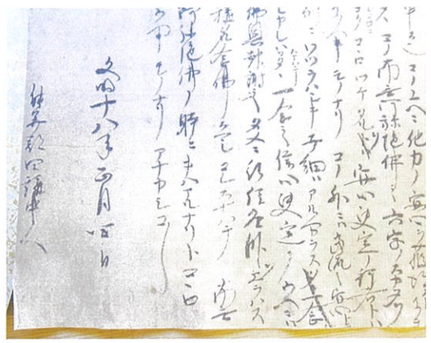
能美四講　旧小松教区

文明十八（1486）年の上人の御消息に、旧能美郡に「能美郡四講（板津・南・山上・山内組）」というお講が始められたと記されています。おそらく江沼六日講と並んで浄土真宗の歴史の中で最も早くできたお講と考えられます。この四講が始まりとなり、今も八つの組お講が組織されています。このことから、旧小松教区ではお講が500年以上続けられていることがわかります。



抑能美郡同行中ニ、就仏法四講ト云事ヲ始テ、当流法義之是非・邪正ヲ可讃嘆興行在之由聞候、マコト二モッテ仏法興隆ノ根元、

（中略）



タヾ一念ノ信心決定ノ上ニハ、仏恩報謝ノタメニハ行住坐臥ヲエラバズ称名念仏スベシ、コレスナワチ南無阿弥陀仏ノ躰ニキハマルナリトココロウベキモノナリ　アナカシコ～

文明十八年正月四日

能美郡四講中へ

＊蓮如上人御消息
伊勢法雲寺（本願寺派）蔵

さらに小松市松任町の興善寺（本願寺派）に残る御消息には、多くの年貢と報恩講の志を収めていたことが記されています。

四講中、年貢之分五千疋、又今月報恩講之志ニ千疋、何モ返～志之至アリカタクコソ候へ、能々披露アルベシ、穴賢～

十一月六日　蓮如　花押

四講中へ

このことからお講とは仏法興隆と本願寺維持のために組織されたことが分かります。

また、上人はお手紙の中で「守護地頭方へ慇懃の振舞いあるべく候」や「四講の人数あまり多く候いては、然るべからず候」など、門徒に対して守護大名など権力を軽視することがないよう心配りしていることがうかがえます。

人と生まれたことの意味をたずねて

ところで当時、各家々にはお内仏は据えられていませんでした。おそらく上人は各地域に、本尊と製本された『正信偈』に加え御消息を授け、教化したものと思われます。本尊は紙に書かれた「六字名号（南無阿弥陀仏）」あるいは「十字名号（帰命尽十方無碍光如来）」でした。それらを各集落へ持ち回りでおかざりをしてお講がつとめられたと考えられます。『蓮如上人御一代記聞書』の「本尊は掛けやぶれ、聖教はよみやぶれ」は、それほどお講が盛んにおこなわれた証しなのでしょう。

さらに当時は封建制度が強い武家社会でした。そんな中で百姓といわれる人々はどれほど生きることに価値を見出していたでしょうか。現代からは想像もできませんが、おそらく虐げられたことは想像に難くありません。そういう人々はお念仏に遇い、生まれた喜びや生きる意味を見出していったのかもしれません。

蓮如上人以降も、歴代の宗主によって授与された御消息が教区内の各地に残されていて、それを拝読して大切にお守りされています。お講をつとめ、私たちの先輩方が出会って伝えてきたものに思いを馳せ、さらに後へ伝えていくことが私たち真宗門徒の仕事なのでしょう。

【蓮如上人略年譜（誕生～加賀一向一揆終焉）】

1415　応永22年	蓮如誕生
1457　長禄元年	43歳本願寺継承
1465　寛正6年	51歳延暦寺衆徒本願寺破却。近江堅田へ
1467　応仁元年	53歳応仁の乱（～1477）
1471　文明3年	57歳吉崎に坊舎を建てる
1474　文明6年	60歳吉崎坊舎消失
1475　文明7年	加賀門徒冨樫政親と組み幸千代を倒す
1489　延徳元年	61歳本願寺門徒、冨樫政親と戦う
1497　明応6年	蓮如、吉崎を去り河内出口（光善寺）へ。
1499　明応8年	66歳山科本願寺建立
1580　天正8年	72歳能美四講のご消息
1582　天正10年	74歳加賀一向一揆激化。政親を滅ぼす。
	75歳蓮如隠居
	83歳大坂石山坊舎完成
	85歳蓮如没
	信長と和睦・石山本願寺を明け渡す
	加賀一向一揆終焉

函蓋相称

法話のページです。「函蓋相称」とは、曇鸞大師が、函（はこ）と蓋（ふた）がぴったり合うように、仏様の御心と衆生が出遇っている状態を喩えた言葉。

加賀市光闡坊
大谷専修学院院長
佐野　明弘

第一深信　決定深信自身、
即是自利信心也
第二深信　決定深信乗彼願力、
即是利他信海也

第一の深信は「決定して自身を深信する」すなわちこれ自利の信心なり。
第二の深信は「決定してかの願力に乗じて深信する」すなわちこれ利他の信海なり。
『愚禿鈔』真宗聖典　四四〇頁

●深信自身

真宗は、信心が要と言われます。何よりも信心です。念仏も信心という形をとって初めて成就するのです。「真実の信心は必ず名号を具す」と説かれるように、信心が本当であれば、その信心の裏側には必ず南無阿弥陀仏がある。けれども、南無阿弥陀仏に必ず真実の信心があるかというと、そうはいかないと親鸞聖人は書いておられるのです。ですから何よりも信心です。その信心の第一番目の相として挙げられるのは、とても意外なのですが、仏様を信じることができたというのではないのです。

善導大師の二種深信について、親鸞聖人が『愚禿鈔』にそれを簡潔にまとめて書いておられます。第一番目の信心の相を「深信自身」と第一深信を四文字でまとめて書いてくださっています。信心が獲られたときの第一番目に明らかになってくる信心の相は、自分というものが知られたということです。深信の「信」という字は、自分の心を固めて思いを確立することでなしに、うなずくという意味です。自らの身に深くうなずいた、こういうことです。これが私たちの受け取る信です。

考えてみますと、私がなぜ仏法を求めたかというと、今の自分では嫌だからです。今の自分のむなしい思いや不安や、そういうものをなんとか仏法を聞いて克服したかったわけです。自分にうなずくことができないので、仏法によってうなずける自分になって救われていこうと思ったわけです。

●自分にうなずきたい

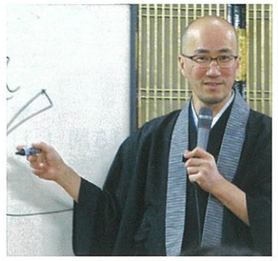
もう十数年前ですが、特急列車で京都まで行くのに加賀温泉から乗ったのです。十分ほど走ると次は芦原温泉で、そこから若い女性が乗ってきて横に座りました。最近若い女性に横に座られると触れないように小さくなっていなければいけない気持ちがするので困るのです。その人は前のテーブルを出して荷物を出し始めました。何をするのかなと思っていましたら、お化粧を始めたのです。鏡で右を見たり左を見たりしていつまでたっても終わらない。ライターでボーとやったりしてびっくりします。そうやって一時間ぐらいして、敦賀を過ぎてもまだやっているわけです。これはおかしいなと、なんでこんなに時間がかかるのかなと思い、考えましたところ、ピンときました。なるほど、これはなかなか自分の思ったような顔にならないのだと。

でもこれは笑えないのです。

私が仏法を求めていた姿というのは、それと全く同じで、むなしい自分が嫌だし、自分の気に入った自分になっていきたい。仏法ではなくて、一般の世間的なまなざしだと、地位や財産があると人から大事にしてもらえます。そういう人から大事にしてもらったり、自分の居場所があったりすると生きやすいわけです。ですから一般には、そういう仕事に就きたいとか、ある程度社会的な地位があり、収入があり、そういうふうに生きやすい自分を求めます。根本的には、社会的にはどうでもいいからともかく自分にうなずきたい、どんな状況にあっても、うなずけないということが問題なのです。

どれだけよい布団に寝ていても悩み事があったら眠れないでしょう。せんべい布団でも満足していれば、ぐっすり眠れるわけです。ですから、環境、周りを整えたら、穏やかになるかというと、そうとばかりもいえない。環境が悪い、状況が悪いから駄目かというと、それもそうとばかりもいえない。結局、今の自分を受け止めることができさえすればいいわけです。ところが、それができないで苦しむわけです。

大切な人やペットなどに先立たれてしまうということがとても苦しいのは、実は亡くなったということよりも、その関係が断たれたそこに置かれている自分が受け止められないでいるのでしょう。先立たれてしまった自分が受け止められないわけです。亡くなってしまったこと以上に、亡くなってしまったことを受け止めることができずに苦しんでいる自分、その自分を受け止めることができないのです。



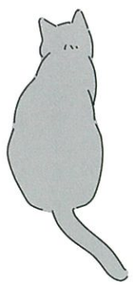
法話中の佐野氏

●乗彼願力

真宗の第一番目の信心の相とは、その自分にうなずくことが初めてできましたということです。どうしてそういうことができたかというと、第二番目にある「彼（か）の願力に乗じている」ことを深信することがあるからです。ここは「乗彼願力」という四文字が大事です。「彼」は阿弥陀仏のことです。私たちの世界がすべてではない。「彼」ということがあるのです。

こちらの世界は「此」（し）なのです。私たちの世界は迷いの世界、苦しみのある流転の世界、娑婆というのです。「彼」は向こう岸です。彼岸。こっちは此岸。世界が違う。そういう「彼」という世界がある。彼の岸、向こう岸は善い悪い、損と得、浄と穢の終わった世界。すべてが終わった世界です。ですから寂静の世界といいます。寂静はただシーンとしているという意味ではなく、あらゆるものがすべて終わった世界、あらゆる相対の終わったという内容を持った世界のことで、ここは非常に静かです。その終わったということを通して立ち現れる深い祈りの世界は静かです。

その「彼の阿弥陀仏の願力に乗じている」ことを深信すると。私たちが乗るわけではないのです。彼の願力に私たちが乗るのではなく、もうすでに生まれる前から願力の世界、願力の中にお命をいただいています。そのことに、今、気が付いた。深信したと。そのような願力、本願力、南無阿弥陀仏をもって私たちに呼びかけ、南無阿弥陀仏をもってして私たちを受け止めている。この第二深信を背景に、その受け止められたという自分に目覚めているというのが第一番目の深信なのです。（了）



教区の主な聞法会のご案内

【9月】

▼日曜講座
3日（日）9時30分～
講師　谷澤 彩 氏（富山教区蓮澤寺）
17日（日）9時30分～
講師　立島 直子 氏（富山教区稱名寺）

▼知恩講
8日（金）10時～
講師　加藤 正樹 氏（加藤道場）
会場　正念寺（加賀市小塩辻町）

▼教区大谷婦人会連絡協議会報恩講
9日（土）10時～
講師　田代 俊孝 氏（仁愛大学学長）

▼十二日講
12日（火）9時30分～
講師　滋野井 光 氏（第二組 稱佛寺）

▼教区推進員連絡協議会シリーズ講座
14日（木）9時30分～
講師　加藤 彰教 氏（第二組 林西寺）

▼同朋の会聞法会
15日（金）13時30分～
講師　池田 勇諦 氏（同朋大学名誉教授）
会場　大聖寺教務支所

▼示談講
22日（金）13時30分～
講師　西島 明正 氏（第一組 願誓寺）
会場　大聖寺教務支所

▼真宗入門講座
22日（金）19時～
講師　滋野井 光 氏（第二組 稱佛寺）

【10月】

▼日曜講座
1日（日）9時30分～
講師　日野 暁洋 氏（第二組 蓮光寺）
15日（日）9時30分～
講師　加藤 正現 氏（第二組 勸正寺）

▼十二日講
12日（木）9時30分～
講師　出雲路 修 氏（第一組 毫攝寺）

【11月】

▼日曜講座
講師未定
5日（日）・19日（日）9時30分～

▼十二日講
12日（日）9時30分～
講師　安江 俊堂 氏（金沢教区信樂寺）

▼知恩講報恩講
15日（水）10時～
会場　専光寺（加賀市山代温泉）

【12月】

▼日曜講座
講師未定
3日（日）・17日（日）9時30分～

▼十二日講
12日（火）9時30分～
講師　新 康紀 氏（第二組 國分寺）

▼示談講
22日（金）13時30分～
講師　芳原 里詩 氏（第一組 妙德寺）
会場　大聖寺教務支所

会場の記載のないものは
すべて小松大聖寺教務所（常磐会館）

10月からは各お寺の報恩講が勤まります
報恩講にお参りしましょう

【編集後記】

ようやく小松大聖寺教区教化広報紙『まいろっさ』創刊号をお届けすることができました。▼小松教区と大聖寺教区の合併に向けて両教区広報部門会議をスタートしたのは2年前の2021年9月でした。旧両教区の各広報紙『大寄小寄』『大聖』にかけられてきた願いや趣旨について協議を重ね、新教区広報紙のアウトラインを模索してきました。そして生まれたのが本紙『まいろっさ』です。▼昔お年寄りたちが「まいろさ」と誘い合ってお寺やお講にお参りしたそうです。そんな仏法聴聞を大事にしていた先人の姿を思い浮かべて発案され、方言を加味して『まいろっさ』となりました。題字は保木悦雄教務所長（教区教化委員長）に揮毫いただきました。▼南加賀に息づくお講文化が次世代に受け継がれることを願い、より多くの人々に読んでもらえる紙面づくりに努めていきたいです。